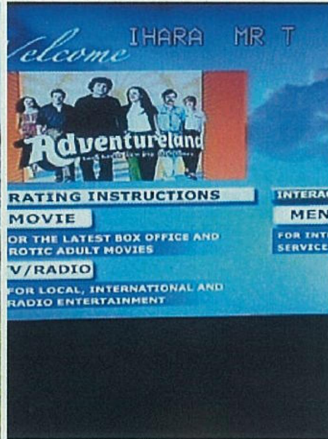


ニュージーランドの首都ウェリントン市。(報告 4)

ニュージーランドは、1000年頃、ポリネシア人が最初に漂着したと伝えられている。英国人探検家ジェームス・クックが1769年に上陸しているが、オーストラリア上陸の1年前の年である。1840年に英国が植民地化し、100年以上も経った1947年になって漸く国家としての主権を確立している。オーストラリアよりもやや南東に位置し、地形は、全体的に平地、なだらかな丘、高山が複合しており、土地の75パーセントが海拔200メートル以上で、火山性地形、地震帯上にある。事実、ホテルに到着して間もなく、震度2程度の地震に見舞われた。面積は、26、7万平方キロメートルで日本の約7割。人口は、427万人で日本の約30分の1で、北島に325万人、南島に102万人が居住している。在留邦人は約1万4千人である。

長崎市に良く似た印象のウェリントン市は、ニュージーランドの首都で人口約179500人。ウェリントン地域全体では、約449千人。農・水産業が盛んな国ながら、ウェリントン市は政治・経済の中心地らしく、農地や羊の群れに出会えなかった。メルキュールホテルでは、個室のテレビにわざわざ個人名を入れて歓迎を表していた。



「自然環境保護区スタグランズ」鳥類たちの楽園。(報告 5)

ウェリントン市郊外の風光明媚なアカタラワ溪谷の美しい森に囲まれた「スタグランズ野生動物保護区」を視察。ここは1972年に民間事業で開設され、広さ10ヘクタールの保護区の中に丁寧に作られた散策道を歩きながら、種々の在来のまたは外来の鳥や動物たちに接し、餌付け体験などができる安らぎの場所となっている。ニュージーランド保護局の指導のもとに、スタグランズは、野生動物保護事業の捕獲動物繁殖プログラムや絶滅危惧種の保存に大きな役割を果たしている。

責任者の説明によれば、ニュージーランドには、もともと哺乳類は生息しておらず、また、蛇の類も全く存在せず、島の75～80パーセントは森林で、鳥類しか存在していなかったらしい。しかし、ハワイ諸島からカヌーで入島したマオリ族の暮らしの中で、家畜やペットを飼育し、それらが繁殖し、植物でも松の木を植林して他の種が伐採されるなど、自然界に重大な影響を及ぼし、絶滅の危機に瀕している生物の種の保存が大きな課題となった。その対策に国を挙げて力を注いでおり、全国の3カ所で保護事業が行われている。清らかな水辺に遊ぶ鳥たち、動物の希少種などにとっては楽園であり、人々も癒される。



ニュージーランドの伸び伸びとした鳥たちに安らぐ。政治・経済は？(報告 6)

ニュージーランドは森と湖の国、豊かな自然に羊が群れ、牧場が広がる住みやすい国との印象が強かったが、「ウインディ・ウェリントン(風の強い町)」で雨混じりの強い風にさらされながら市周辺の狭い範囲を観たに過ぎないのでその雰囲気に触れる事は出来なかった。ただ、先にみたように自然保護には抜きん出ているように思われ、シビック・スクエアにあるニュージーランド唯一の国立博物館「テ・パパ」とその周辺を観ても、文化政策に力が注がれているのが良くわかる。「鉢の巣」と呼ばれる議員執務室は議事堂に隣接したユニークな建物であった。中心市街地の商店街に、オールブラックス専門店を見て、子どもたちに頼まれていたシャツ類はゲットした。だが国政では、国鉄改革、郵政改革は思うような効果は期待できず、地方自治体の財政事情の厳しさも垣間見た。しかし、もともとの主人公たる鳥たちはのびのびと暮らしている。明日は「ゼロ・ウェイスト政策」(ゴミ・ゼロ運動)を推進しているポリリア市を視察する。(10月11日)



「ゼロ・ウェイスト政策」議会制度について。ポリルア市訪問。(報告 7)

ポリルア市は、ニュージーランドの首都ウェリントンから約20キロ北に位置する静かな海沿いの町である。最近、ウェリントンのベッドタウン的な発展があり、ショッピングスポットとして、また、雄大な美しい海岸線を生かしたアウトドア、スポーツ、レジャー都市として、環境共生を目指している。人口は約51000人。市庁舎には、私たちが歓迎して、ニュージーランド国旗、日の丸、ポリルア市の市旗の3本が掲揚されていた。ベテラン市長が滔々と話し出した。市制施行は44前。ジェニー・ブラッシュ市長は3代目で12年目を迎えている。市議は北区5人、東区5人、西区3人計13人で内5人が女性。市長は市全体で選ばれ、議長は市長が兼務する。行政は市長と議会で選んだ主席行政執行官が市と議会に責任を持って行う。ニュージーランド中央政府は1院制度で比例代表並立制により、全国120人の議員が選ばれ、税と立法を受け持っている。ポリルア市の職員は350名である。2000年に、2015年までに「ゴミ・ゼロ」を目指す方針を採択し、「ごみ再生化法」を成立させて、「ゴミコーディネーター」を置き、民間の力を借り、また、ミミズは有効なパートナーになっている。現在は、毎日バス17台、年間6000台のゴミを排出している。後刻、民間事業施設にもご案内する。



資源回復センター。徹底した分別再利用だが —。(報告 8)

ニュージーランドはカナダと同様に、ゴミの焼却処理を禁止している。従って、大量の生ゴミはどのように処理しているのか、粗大ゴミはどう処理して「ゴミゼロ」を実現しようとしているのかは、実に興味深い課題である。以前ドイツの先進的ゴミ処理施設を視察したことがあったが、埋め立てた生ゴミから発生するメタンガスを集めて取り出し、エネルギーとして活用していた。しかし、作業環境は劣悪で、案内のバスから出た途端に、卒倒するような悪臭に耐えられなかった。カナダでは、驚くばかりに広大な生ゴミ処理施設で数段に分けて肥料化しており、悪臭は感じられなかった。長崎では、三方山で下水道汚泥をコンポスト化しているが、ゴミ質としては均一に近い汚泥でも、その悪臭は凄まじい。ニュージーランドの「先進的施設」では、生ゴミ処理をどうしているのかは、説明が得られなかった。

リサイクルセンターの奥地上空に、夥しい数の鳥たちが舞っているのが見えたが、多分生ゴミ処理の場所であろうと推測した。リサイクルセンターは、2002年12月に建築廃材などを再利用し手作り感覚で作られた民間施設で、埋め立て処分場の入り口に位置しており、粗大ゴミを道端で回収する仕組みである。責任者のアリソン・レウイン女史は、「この施設は、最も大切な環境教育の拠点であり、難民や障害者の雇用の場でもあります」と胸を張った。実は、何処でも見られる分解再利用、修理して再利用に供する施設であるが、修理・再生された「商品？」は、野積み状態で雨露がしのげず屋根取り付けが急務に思えた。「ゴミ・ゼロ」までには、相当な課題が残されているように感じた。持ち込まれた資源物の部品を利用して、施設のあちこちに置かれていたオブジェが唯一ユーモラスであった。

